

一看護系大学の地域貢献活動におけるキャリアアップ講座の分析
—医療従事者の受講者自己評価アンケートから—

Analysis of a Career-Advancement Class Implemented by Nursing College
as a Regional Contribution Activity
- Based on the Results of a Self-Assessment Questionnaire
Involving Health Care Professionals Who Attended the Class -

金森京子 Kyoko Kanamori	磯邊厚子 Atsuko Isobe	大籠広恵 Hiroe Ohgomori
鈴木美佐 Misa Suzuki	田原育恵 Ikue Tahara	上野範子 Noriko Ueno

聖泉看護学研究 第3巻 別刷

(2014年3月27日発行)

一看護系大学の地域貢献活動におけるキャリアアップ講座の分析 —医療従事者の受講者自己評価アンケートから—

Analysis of a Career-Advancement Class Implemented by Nursing College
as a Regional Contribution Activity

- Based on the Results of a Self-Assessment Questionnaire Involving Health
Care Professionals Who Attended the Class -

金森 京子^{1)2)*}, 磯邊 厚子¹⁾²⁾, 大籠 広恵¹⁾²⁾,
Kyoko Kanamori, Atsuko Isobe, Hiroe Ohgomori,
鈴木 美佐¹⁾²⁾, 田原 育恵¹⁾²⁾, 上野 範子¹⁾²⁾
Misa Suzuki, Ikue Tahara, Noriko Ueno

キーワード 看護系大学, 地域貢献, 看護研究, 生涯学習, 研修, キャリアアップ講座

Key words nursing college, regional contribution, support for nursing research, lifelong learning,
training, classes of career up

抄録

背景 A大学看護学部附属看護キャリアアップセンターでは、平成23年の開設以来、地域貢献の一つとして、“キャリアアップ講座（主に臨床看護師への研究支援）”を開講している。年々、受講者が増加し、研究への関心が高まっている。

目的 キャリアアップ講座において、受講者の受講動機及び本講座の学習効果について、受講後にアンケート調査を行うことにより、“キャリアアップ講座”の有用性を確認する。同時に今後の課題についても検討する。

方法 「平成25年度“キャリアアップ講座”」に参加した38名を調査対象とし、講座内容について独自に作成した無記名自記式質問紙調査票を用いて回答を得た。データの集計・分析は表計算ソフトMicrosoft office Excel 2007を使用し、記述統計を行った。

結果 分析対象となった受講者は3回の研修を通じて計94名であった。職種では病院勤務の看護師が多かった。受講背景は、職場の上司からの薦めで受講した者が多かった。多くの受講者が、研究の意義や目的、方法がわかったと回答した一方で、データ処理が不得手という傾向も確認できた。

結論 アンケート結果から、受講者の研究への関心の高さや学習効果に肯定的な結果を得た。これらの結果を、今後のキャリアアップ講座内容の充実に反映させていきたい。

Abstract

Background Since the establishment of the Nursing Career-advancement Center affiliated with the Department of Nursing of A University in 2011, career-advancement classes have been held as a regional contribution activity. These classes are provided primarily to support clinical nurses with research activities, and there have been increases in the number of participants and their interests in research.

Aim Following the career-advancement classes, questionnaire surveys were conducted to examine their utility and future challenges. Participants were asked to describe their motivation for participating in career-advancement classes and their learning effects.

Methods The subjects were 38 health care professionals who participated in the "2013 Career-advancement Class", and they were asked to complete an originally developed, anonymous survey form including questions regarding the class. Descriptive statistical data were aggregated and analyzed using Microsoft Office Excel 2007 - spreadsheet software.

Discussion The total number of subjects who participated in one of the three sessions was 94. The majority of the subjects were hospital nurses. A large number of health care professionals attended the class on the recommendation of their superiors. Although many participants stated that the class helped them learn research purposes and methods, some had difficulty processing data.

Conclusions The survey results, which suggest that participants in the class became more interested in research and it had positive learning effects, can be used to improve the career-advancement class.

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

²⁾ 聖泉大学 看護学部附属キャリアアップセンター Career Improvement Center, Seisen University

* E-mail kanamo-k@seisen.ac.jp

I. 緒言

A大学看護学部は、平成23年4月に開設され3年目を迎えた。大学の重要な役割として、教育、研究、地域貢献があげられるが（川野，2004），看護系大学に期待・要望されている地域貢献活動には、①看護実践や研究を通じた研修（鈴木，2006；森，2006；川野，2005），例えば，最新の情報提供や看護研究の研修，共同研究のサポート etc，②地域の特色を反映した地域住民への健康教育（大湾，2006），③学生の臨地実習を通じた教育活動（新道，2006；永峰，2005），④看護学校教員への教育プログラムの開発などがある（宮地，2003）。A大学においても，地域に貢献するというその設立理念に基づき，学部開設時に看護学部附属看護キャリアアップセンター（以下，センター）が設置された。

センターでは，“キャリアアップ講座”と名付けた講座を開講し，卒業後の看護師がより質の高い看護を目指すための一環として，研究への学習支援を行っている。同時に本講座をよりよく発展させることをねらいとして，医療や保健，福祉，学校保健分野からの参加者の相互交流の場を提供している。講座の終了時には，毎回受講者のキャリアアップ講座受講に対する自己評価アンケートを実施し，その結果を活動報告書としてまとめている

る（松永，2012；聖泉大学看護学部附属看護キャリアアップセンター委員会，2013）。

本稿は，さらに受講者の受講動機や受講後の自己評価を振り返り，受講者にとってのキャリアアップ講座の有用性について評価するとともに，今後の課題を得ることを目的とした。

用語の定義

A大学では“キャリアアップ講座”と題し，研究支援を主とした学習コースを立ち上げている。プログラムは，研究方法から学会発表までの一連の研究方法を段階的に学ぶ内容としている。以下に，本稿における用語を定義する。

“キャリアアップ講座”とは，卒業後，対象者自らがさらに研究に関する知識や技能を高め，より質の高い医療・保健・教育を目指す講座を言う。“キャリアホップ”とは，研究の導入と位置付け，本講座の第1回目の研修会のことを言う。“キャリアステップ”とは，第2回目の研修会のことを言い，“キャリアアップ”とは，第3回目の研修会のことを言う。“キャリアサポート”とは，第4回目の研究に関する個別相談のことを言う。なお，各講座の内容については，次の章で述べる。

表1 キャリアアップ講座の概要

回	研修名	日程	研修テーマ(時間数)	受講者	調査協力者
第1回	キャリアホップ	6月10日(月)	開講のご挨拶 1. 研究の方法と進め方について学ぼう(70分) 2. 文献検索の方法を学ぼう(80分) 3. 看護研究文献をクリティークしてみよう(80分) 意見交換(60分)	31名	30名
第2回	キャリアステップ	7月25日(木)	1. アンケート調査の方法について学ぼう(70分) 2. Excelを活用したデータ処理を学ぼう(80分) 3. 基礎統計を学ぼう(80分) 意見交換(60分)	37名	35名
第3回	キャリアアップ	8月20日(火)	1. 研究成果のまとめ方と発表について学ぼう(70分) 2. 学会発表の方法を学ぼう(70分) 3. 口頭発表のスライドを作成してみよう(70分) 意見交換、閉講式(60分)	32名	29名
第4回	キャリアサポート (個別相談)	9月10日(火)	個別研究相談(120分)、修了証書授与式	19名	—

II. キャリアアップ講座の概要

講師は全てA大学の教員が担当しており、講座は4回連続の研修コース受講を原則としている。受講者の希望により1回目の受講もしくは2回目の受講のみなど、取捨選択することができる。

1. 受講者の募集方法

平成25年度本講座の募集方法は、以下の方法で行った。

1) B県下の医療・福祉・教育施設への郵送による案内と募集

平成25年3月に、A大学におけるキャリアアップ講座開催の案内文書および平成24年度キャリアアップセンター活動報告書を、以下の対象施設の代表者宛に郵送した。対象施設は、B県病院協会会員である県内の病院、A大学看護学部臨地実習委託施設（病院・訪問看護ステーション・老人保健施設・保健所・市町村保健センター・保育園などを含）、B県看護協会、B県教育委員会、B県養護教諭研究会、平成24年度キャリアアップ講座参加者の所属施設、計111か所であった。

2) A大学ホームページによる案内と募集

平成25年4月よりA大学公式ホームページに、平成25年度"キャリアアップ講座"開催の概要および申込方法についての案内を掲載した。講座の申込みと受け付けは、所定の申込用紙を用いた郵送、またはメールの送受信で行った。応募者数は、応募締切日までに募集定員30名を上回り、最終的に38名で受講人数を絞めた。

2. 講座の内容

表1の通り、第1回研修"キャリアホップ"では、研究の基本となる方法と進め方、文献検索の方法、看護研究の文献クリティークについて学習した。第2回研修"キャリアステップ"では、量的研究を想定した質問紙調査の方法、Excelを活用したデータ処理、基礎統計について学習した。第3回研修"キャリアアップ"では、学会報告を目指して研究成果のまとめ方と発表、学会発表の方法、口演のスライド作成、加えて、研究倫理について学習した(表1)。第2回、第3回には、事前に受講者個人からExcelとPowerPointの操作に関するパソコン習熟度を簡易の質問紙を用いて

確認し、「できない」「わからない」と回答した受講者には、看護学部の教員が補助として受講者をサポートした。第4回"キャリアサポート"では、受講者の希望により個人が持っている研究テーマについて具体的にA大学の教員に相談できる場とし、看護学部の全領域の教員が個別研究相談員として対応した。

なお、第4回目の"キャリアサポート"については、講義形式の研修ではなく受講者からの研究相談であったため、今回の研究目的に沿った同系統の質問紙調査は実施していない。したがって、本稿では研究目的に照らして第1回～第3回の研修"キャリアホップ" "キャリアステップ" "キャリアアップ"に参加した受講者を対象とした調査ならびに分析とした。

III. 方法

1. 研究デザイン

量的データに自由記載の評価を加えた実態調査であり、"キャリアアップ講座"に参加した受講者を対象とした後方視調査による断面的観察研究である。

2. 対象

調査対象は、センター主催「平成25年度キャリアアップ講座」の第1回から第3回までの研修に参加した受講者とした(1回でも参加した者を含む)。

3. 調査方法

独自に作成した無記名自記式質問紙調査票と対象者への研究参加の依頼文を準備し、次の方法で配布・回収した。調査票は研修当日に"キャリアアップ講座"が開催される講義室において配布し、当日のプログラムがすべて終了した時点で説明を加え、同意を得たものの提出により回答を得た。受講者共通の属性や参加動機は、第1回目に回答を得、第1回目に参加できなかった人は第2回目に、第2回目に参加できなかった人は第3回目に回答を得た。回答用紙は、回収ボックスを設置し任意で投函してもらう方法で回収した。

調査項目は、受講者の基本属性(性別・年齢・職種・勤務先の種別)、各研修コースの1.講義の内容、2.講義資料、3.総合評価、4.自由記載であ

り、4.については今回の受講動機、また研究への取り組みについて感じていることを尋ねた。加えて、本講座の募集および開催間隔・受講背景・研究に対する印象等についても質問した。具体的な問いは、各研修コース共通の自己評価として、①就職後研究を学ぶ機会があったか、②各講義のテーマと内容は一致していたか、③講師の説明はわかりやすかったか、④資料は理解しやすい内容だったか、⑤研修から得られた内容は有用であったか、⑥研修コースでの学習が、あなたの今後の仕事や研究に役立つかの、6項目であった。第1回目の講義内容の問いは、①研究の意義と目的、③研究の種類、④研究の方法、⑤文献検索の必要性、⑥文献検索の方法、⑦クリティークの方法と手順、其々が解ったか、の6項目であった。2回目の講義内容の問いは、①調査方法(手順)、②質問紙の利点と評価、③質問紙の作り方、④Excelを使ったデータ処理の方法(入力、表計算、グラフの作成など)、⑤基礎統計の処理方法(度数、パーセント、平均値、グラフの作成など)が解ったか、⑥Excelを使ったデータ処理が出来るようになったか、の6項目であった。第3回目の講義内容の問いは、①学会発表の目的、②発表の種類(講演、ポスター等)、③発表の方法(図表の使用)、④研究に必要な倫理的手続き、⑤スライド・ポスターの作成の仕方、⑥ポスターを作るためのポイント、⑦発表原稿の作成時の注意事項、⑧学会参加時の注意事項が解ったか、の8項目であった。なお、第2回、第3回のパソコン演習については、看護学部教員スタッフの支援があってよかったかどうかについても尋ねた。

4. 分析方法

質問紙調査票の回答方法はリッカートの5段階間隔尺度を用い、5「思う(はい)」、4「ほぼ思う(どちらかと言えばはい)」、3「どちらとも言えない」、2「あまり思わない(どちらかと言うといいえ)」、1「思わない(いいえ)」で回答を得た。①研究を学ぶ機会、②講義テーマと内容の一致、③講義内容のわかりやすさ、④講義資料のわかりやすさ、⑤研修内容の有用性、⑥今後の仕事や研究への役立ち、の6項目については共通評価として毎回同じ質問をし、延べ人数で集計・分析した。各回の内容に関する質問については、各回の人数で集計と分析をした。データ処理には、

表計算ソフトMicrosoft office Professional 2007のExcel 2007を使用し、記述統計によって行った。今回の受講動機に関する自由記載については、記載内容から【研究の担当になったため】【研究の基礎や方法を学びたいため】【研究の指導的立場になったため】の3つに分類し、共同研究者らで検討を重ねた。実施にあたっては、予備調査(プレテスト)を行い、方法や手順に修正を加えた。

5. 研究期間

研究期間は平成25年4月から12月、うち調査期間は平成25年6月から8月であった。

6. 倫理的配慮

各講座終了時に、受講者へ、本研究の趣旨と調査方法を書面と口頭で説明し、協力を依頼した。次に、同じく受講者へ、個人情報(目的外利用から完全に保護されることを口頭または書面で説明し、データの取り扱い(全て無記名のままコード化し、コンピュータで処理することを伝えた。同意を得る方法は、受講者に研究参加に関する説明書と調査票を手渡しで配布し、調査票が回収されたことをもって同意が得られたものとした。

なお、本研究は、A大学倫理審査委員会において承認を得ている(承認番号:9)。

IV. 結果

平成25年のキャリアアップ講座は、いずれも平日開催であったが、第1回は6月10日、第2回は7月25日、第3回は8月20日、第4回は9月10日と一定の間隔を空け、現場の看護師などが業務を調整しながら参加できるよう日程構成を行った。受講者数は1回目31名、2回目37名、3回目32名であった。全受講者数は17施設、実質38名の参加であった(表1)。調査の協力が得られた人数は、第1回は受講者数31名中30名、第2回は37名中35名、第3回は32名中29名で、延べ94名を分析対象とした。

1. 受講者の属性

受講者38名の性別は、女性34名(89.5%)、男性3名(7.9%)、無回答1名(2.6%)であった。年齢は、20歳台11名(29.0%)、30歳台11名(28.9

表2 今回受講した動機

n=32

<p>【研究の担当になったため】 n=15</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院で研究発表をしなければいけないから ・現在看護研究中であり、内容等を深めたいと思ったから ・チームで研究を進めていて、アンケートを取ったもののその活用方法が分からなかったため ・看護研究に取り組むに当たり、当研修が必要な内容であったため ・今年、研究を行っている ・本年度の研究チームに選ばれたので。初めてなので1から勉強しようと思った ・今年度看護研究の担当にあたり、勉強をしようと思い受講しました。 ・今年度の看護研究の担当の順番が回ってきたため。できれば去年の分が受けられれば良かった ・来年自部署が研究発表を行わないといけないため ・今年度、看護研究に取り組んでいるため。また指導のため ・今年、看護研究の担当になっているため ・現在研究をしており、発表を控えている ・初めての研究で、今年度看護研究を行う上で学びました ・看護研究チームに入ったので ・今回10月に学会で発表するため <p>【研究の基礎や方法を学びたいため】 n=13</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究をするにあたり、統計、エクセルの使い方等を学びたかったため ・研究してみたい思いはありましたが、方法がわからなかったため。 ・パソコンが苦手ですが、発表する時パワーポイントがくれたらと思い参加しました ・エクセルでの統計処理の基本が知りたかったから ・Excelを使った統計の活用を知りたかったから ・研究で利用するアンケート集計・活用方法を学びたかったので ・研究について基礎から学びたいと思ったから ・看護研究の進め方が分からない ・今後の研究に役立たせるため ・Excelデータの処理、基礎統計について学びたかった為（どのような表にまとめればみやすいかも） ・研究について理解を深めたいと思ったので ・初めて研究するため ・統計について学びたかった <p>【研究の指導的立場になったため】 n=4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主任として看護研究をサポートするために、自らが進め方などの知識を得ないといけないと思った ・日々の看護を振り返るまとめをしていくため。後輩へのアドバイスに自信が持てるように ・院内看護研究のリーダーをするから ・研究に活かすため、指導のため
--

%), 40歳台 9名 (23.7%), 50歳台以上 5名 (13.2%), 無回答 2名 (5.3%) であった。職種は、看護師 28名 (73.7%), 養護教諭 4名 (10.5%), 保健師, 助産師, 准看護師, 介護福祉士, 作業療法士が各 1名 (13.2%), 無回答 1名 (2.6%)。勤務先の種別は、病院 30名 (78.9%), 中学校 4名 (10.5%), 介護老人保健施設・老人ホーム 2名 (5.3%), 訪問看護ステーション 1名 (2.6%), 無回答 1名 (2.6%) であった。

2. 受講動機

受講者の本講座受講への申請状況として、自ら進んで受講した人は回答が得られた35名中11名 (31.4%), 誰かに勧められて受講した人は24名 (68.6%) であった。「勧められて」と回答した24名人のうち、誰から勧められたかの問いには、看

護部長・副部长・病棟師長・主任会等の上司からが18名 (75.0%), 同僚 2名 (8.3%) であった。

今回の受講動機については、32名の回答があった (表2)。**【研究担当になったため】**のカテゴリーに属する回答者は15名 (46.9%), **【研究の基礎や方法を学びたいため】**のカテゴリーに属す

Q1.就職後に、研究を学ぶ機会がありましたか(n=94)

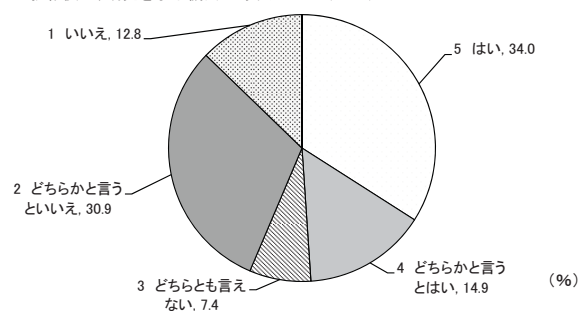


図1 就職後の看護研究に関する継続教育の機会

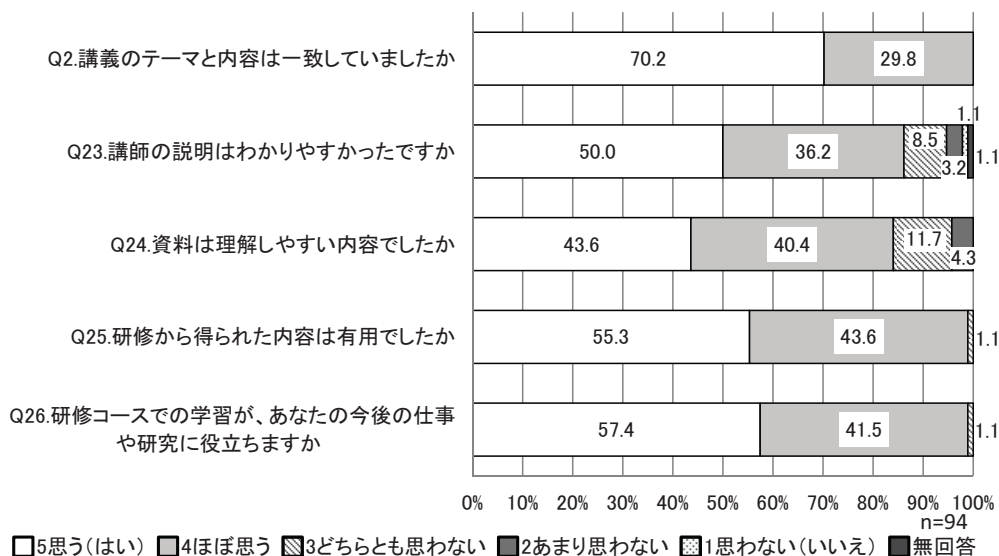


図2 各研修コース共通の受講者評価

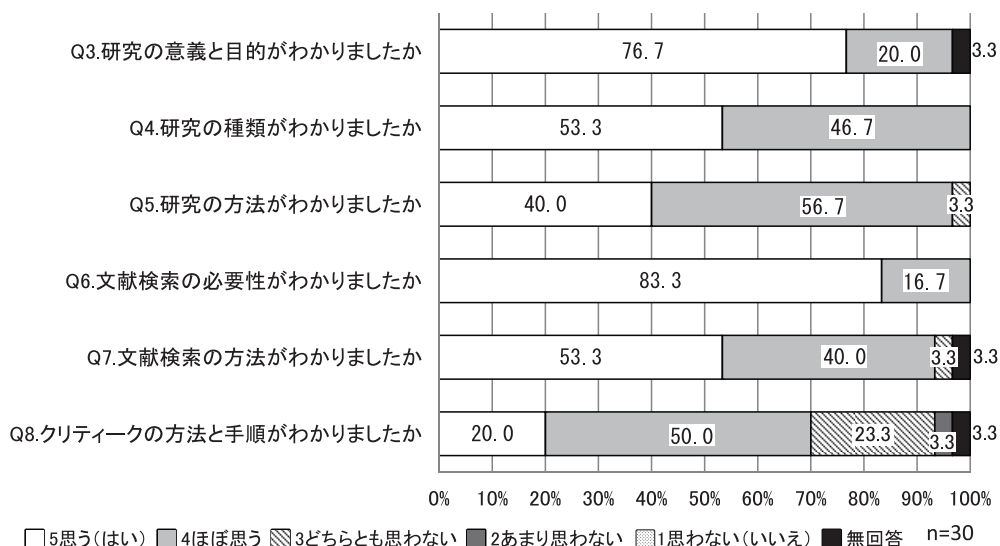


図3 第1回研修"キャリアホップ"の受講者評価

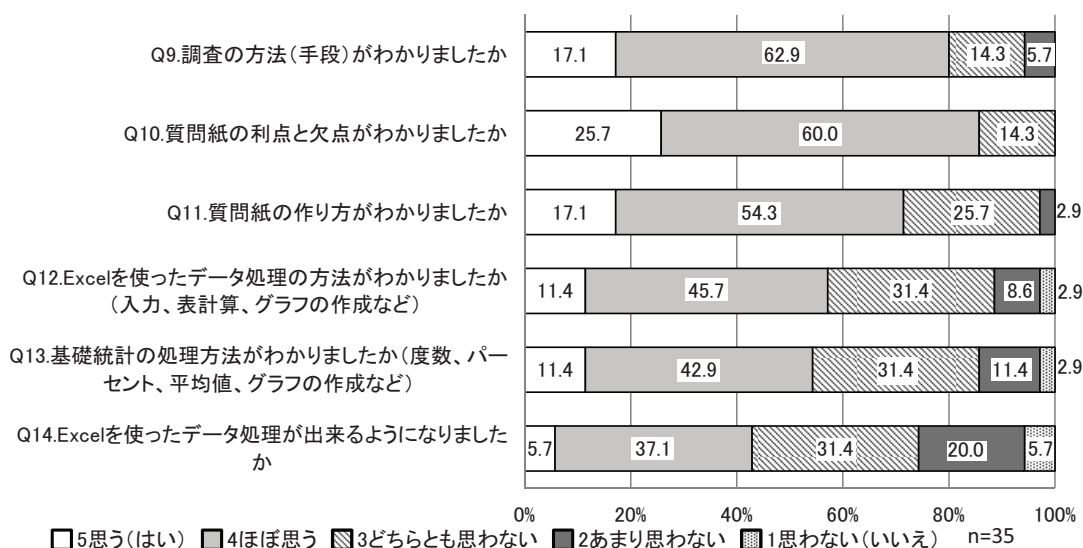


図4 第2回研修"キャリアステップ"の受講者評価

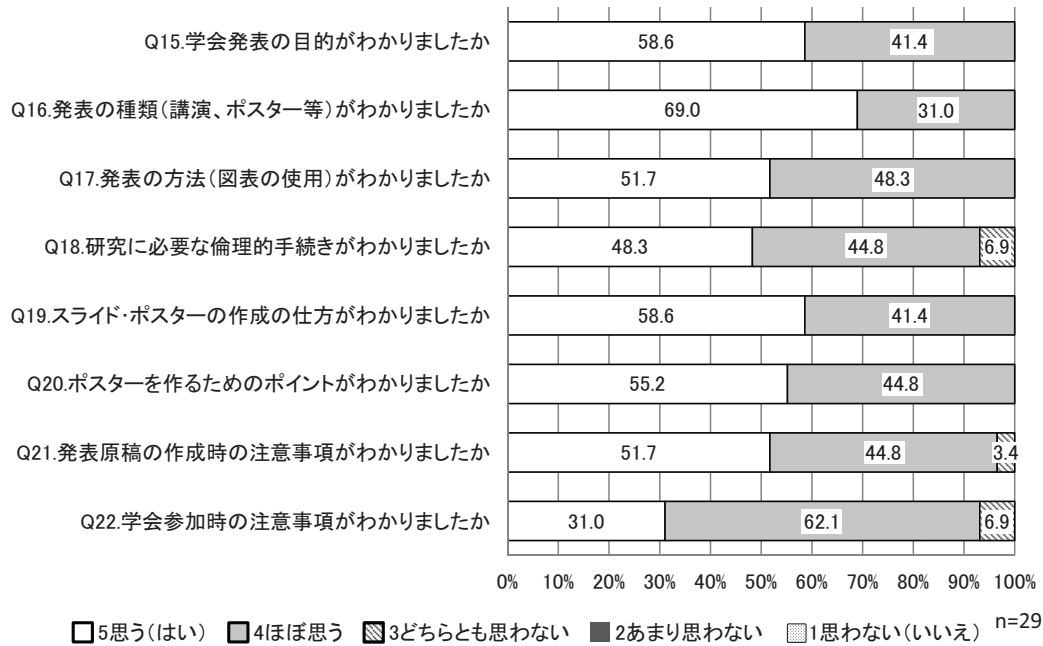


図5 第3回研修"キャリアアップ"の受講者評価

る回答者は13名(40.6%)、【(自身が)指導的立場になったため】のカテゴリーに属する回答は4名(12.5%)であった。

研究への取り組みについて感じていることについては、26名の回答があった。「仮説を立て、方法を考えて取り組むことは、自分の頭の整理も出来るし、人に伝えるときにもわかりやすい」や、「日々の看護を振り返る手段」「看護の質の向上」「ケアの充実のために研究は必要なこと」「スタッフで1つの出来事を究明していく過程が好き」「勉強になる」など、肯定的で前向きな意見は、26名中13名(50.0%)の回答があった。一方、「難しいので不安」「よくわからないから苦痛」「思うようにできない」などの苦手意識や、時間的制約に伴う負担感なども、同数の13名(50.0%)にみられた。

"Q1. 就職後、研究を学ぶ機会があったかどうか"の問いについては、研修ごとに同じ質問をしており、延べ94名の回答を得た。「どちらとも言えない」と回答した人は7名(7.4%)、「どちらかと言うといいえ」と回答した人は29名(30.9%)、「いいえ」と消極的な回答をした人は12名(12.8%)で、合計すると48名(51.1%)あった(図1)。

3. 受講者の自己評価

1) 各回に共通した質問項目の結果

分析対象は延べ94名であった(図2)。「Q2. 講義テーマと内容は一致していた」は「思う(はい)」66名(70.2%)「ほぼ思う」28名(29.8%)で計94名(100%)、「Q23. 講師の説明はわかりやすかった」は「思う(はい)」47名(50.0%)、「ほぼ思う」34名(36.2%)で計81名(86.2%)、「Q24. 資料は理解しやすい内容だった」は「思う(はい)」41名(43.6%)、「ほぼ思う」48名(40.4%)で計89名(84.0%)、「Q25. 研修から得られた内容は有用だった」は「思う(はい)」52名(55.3%)、「ほぼ思う」41名(43.6%)で計93名(98.9%)、「Q26. 今後の仕事や研究に役立つ」は「思う(はい)」54名(57.4%)、「ほぼ思う」39名(41.5%)で計93名(98.9%)であった。

2) 第1回研修調査の結果

分析対象は30名であった。質問項目6項目についてわかったかどうか理解度を求めたところ、次の通りであった(図3)。「Q3. 研究の意義と目的がわかった」は「思う(はい)」23名(76.7%)「ほぼ思う」6名(20.0%)で計29名(96.7%)、「Q4. 研究の種類がわかった」は「思う(はい)」16名(53.3%)「ほぼ思う」14名(46.7%)で計30名(100%)、「Q5. 研究の方法がわかった」は「思う(はい)」12名(40.0%)「ほぼ思う」17名(56.7%)で計29名(96.7%)、「Q6. 文献検索の必要性がわかった」は「思う(はい)」25名(83.3%)

%)「ほぼ思う」5名(16.7%)で計30名(100%)、"Q7. 文献検索の方法がわかった"は「思う(はい)」16名(53.3%)「ほぼ思う」12名(40.0%)で計28名(93.3%)、"Q8. クリティークの方法と手順がわかった"は「思う(はい)」6名(20.0%)「ほぼ思う」15名(50.0%)で計21名(70.0%)であった。

3) 第2回研修調査の結果

分析対象は35名であった。パソコン操作に関する事前習熟度調査では、「ファイルの作成・保存」「文字や数字の入力」「セルの色や形成等の書式設定」「グラフの作成」「数式(足し算, 掛け算など簡単な計算式)の利用」「関数(SUM, IF関数)の利用」「ピボットテーブルやマクロ等の高度な設定」ができるかを確認した。「ファイルの作成・保存」「文字や数字の入力」「セルの色や形成等の書式設定」については5割から9割以上ができると回答しており、「グラフの作成」「数式(足し算, 掛け算など簡単な計算式)の利用」「関数(SUM, IF関数)の利用」「ピボットテーブルやマクロ等の高度な設定」については、8割以上が「できない」「わからない」と回答しており、操作が全く初めてで不得手に思っている人から、ある程度日常的に使用されている人、さらには高位レベルのスキルをもつ人まで幅がみられた。

「看護学部教員スタッフの支援があつてよかつたか」の問いには「思う(はい)」が24名(68.6%)、「ほぼ思う」は8名(22.9%)、計32名(91.4%)であった。

質問項目6項目についてわかつたかどうか理解度を求めたところ、次の通りであつた(図4)。「Q9. 調査の方法(手段)がわかつた」は「思う(はい)」6名(17.1%)「ほぼ思う」22名(62.9%)で計28名(80.0%)、「Q10. 質問紙の利点と欠点がわかつた」は「思う(はい)」9名(25.7%)「ほぼ思う」21名(60.0%)で計30名(85.7%)、「Q11. 質問紙の作り方がわかつた」は「思う(はい)」6名(17.1%)「ほぼ思う」19名(54.3%)で計25名(71.4%)、「Q12. Excelを使ったデータ処理の方法がわかつた」は「思う(はい)」4名(11.4%)「ほぼ思う」16名(45.7%)で計20名(57.1%)、「Q13. 基礎統計の処理方法がわかつた」は「思う(はい)」4名(11.4%)「ほぼ思う」15名(42.9%)で計19名(54.3%)であつた。「Q14. Excelを使ったデータ処理の方法が出来るように

なつた"どうかは「思う(はい)」2名(5.7%)「ほぼ思う」13名(37.1%)で計15名(42.8%)にとどまつた。

4) 第3回研修調査の結果

分析対象は29名であつた。先に「看護学部教員スタッフの支援があつてよかつたか」尋ねたところ、「思う(はい)」が25名(86.2%)、「ほぼ思う」が3名(10.3%)、計28名(96.5%)であつた。

質問項目8項目についてわかつたかどうか理解度を求めたところ、次の通りであつた(図5)。「Q15. 学会発表の目的がわかつた」は「思う(はい)」17名(58.6%)「ほぼ思う」12名(41.4%)で計29名(100%)、「Q16. 発表の種類(講演, ポスター等)がわかつた」は「思う(はい)」20名(69.0%)「ほぼ思う」9名(31.0%)で計29名(100%)、「Q17. 発表方法(図表の使用)がわかつた」は「思う(はい)」15名(51.7%)「ほぼ思う」14名(48.3%)で計29名(100%)、「Q18. 研究に必要な倫理的手続きがわかつた」は「思う(はい)」14名(48.3%)「ほぼ思う」13名(44.8%)で計27名(93.1%)、「Q19. スライド・ポスターの作成の仕方がわかつた」は「思う(はい)」17名(58.6%)「ほぼ思う」12名(41.4%)で計29名(100%)、「Q20. ポスターを作るためのポイントがわかつた」は「思う(はい)」16名(55.2%)「ほぼ思う」13名(44.8%)で計29名(100%)、「Q21. 発表原稿の作成時の注意事項がわかつた」は「思う(はい)」15名(51.7%)「ほぼ思う」13名(44.8%)で計28名(96.5%)、「Q22. 学会参加時の注意事項がわかつた」は「思う(はい)」9名(31.0%)「ほぼ思う」18名(62.1%)で計27名(93.1%)であつた。

V. 考 察

今回研究については関連する周辺論文を参考にしながら検討を加えた。

1. 受講者の属性

受講者数は、平成25年度は前年に比べると増加傾向にある(平成23年度11名, 平成24年度38名)。平成25年度の対象は、保健師, 助産師, 准看護師を含む看護職者が81.6%と最も多く、ほか中学校の養護教諭, 介護福祉士, 作業療法士が含まれていた。病院勤務の看護師が多かつたのは、本講座

への参加を募った施設がB県病院協会会員である県内の病院、A大学看護学部臨地実習委託施設を中心とした施設であったことによると考えられる。

年齢層は20歳台、30歳台、40歳台とも4分の1を占めており、計81.6%であった。柳川ら(2011)は、専門・関心領域を明確にしている中堅看護師は就職後2年から3年を終えた時点で中堅看護師に移行したと感じており、臨床における役割を担いながら、自己成長を願い質の高い看護を提供したいという思いをもちながら自己投入できるものを探すことをし始めている、と述べている。また、本田ら(2012)は、キャリアニーズの特性として、キャリア志向の形成は10年後に及ぶ仕事の経験年数が必要であることを明らかにしている。その中でジェネラリストとしての実践能力の向上を希望する者や、特定の実践分野でのスペシャリストを希望する者は、臨床経験年数12～20年の群で高かったと述べており、継続教育の方向性の一端を示している。20歳台、30歳台、40歳台は、社会における生産年齢世代として仕事の醍醐味を感じる年代でもあり、内外からの触発を受けて、自身を高めるための1つの手段として研究に行きつくものと思われた。また中には40歳台、50歳台の管理業務に携わっている熟練看護師も含まれており、直接ケアに携わる者だけでなく研究を指導する者の参加があった。以上より、看護の現場全体として、研究の必要性が浸透してきたことが伺えた。

2. 受講動機に関する考察

1) 受講者の動機・思い・困難性

本講座に自ら希望して受講したと回答した人は全体の3割に留まり、誰かに勧められて受講したと回答した人は7割であった。業務に関わる研修であっても一般的に勤務時間外の活動になりやすい。そのため自ら希望して受講する人より他者からの勧め、とりわけ組織における上司の声かけの存在が後押しとなっていることが伺えた。

受講の動機は、研究の基礎や具体的方法について学びたいと考えた動機以外に、受講者自身が職場の研究担当になった理由や、後輩の研究指導に当たらなければならなくなったからなど、必要に迫られた職責上の理由が半数近くあった。本講座を受講したことは、学ぶ意欲の現れであり、それとともに、職場における自らの役割と責任を果た

したいと考えていたのではないかと推測される。

研究について感じていることについて特記すべきことは、「難しいので不安」「アンケート処理が難しい」「思うようにできない」など、研究への苦手意識が見られたことである。看護職の不定期な勤務状況などもその要因と考えられ、仕事をこなしながら研究のための時間を作る困難さが伺えた。施設自体が看護をよくしたい、そのために看護研究を行うといった、施設全体に動機が発するものであり、研究のための一定の時間をスタッフに確保するというサポート体制が必要である。

今回の講座は平日の開催であったが、より受講を希望する人に寄り添った考え方からすれば、土・日・祝日を含めた運営が可能かどうか、検討することも必要になってくる。

2) 講座への期待

就職後の研究を学ぶ機会については、約半数の人は「学ぶ機会がなかった」と答えた。研究の必要性を感じながらも、方法がよくわからない、あるいは学ぶ機会が得られないと訴えた人にとって、本講座への参加は貴重な機会であり、自己のキャリアアップに繋がったと言える。それがさらに職場内に波及することで対人援助の質の向上に繋がっていくと考えられる。

最近、日常業務においても研究的思考が発達し、例えば院内の病棟単位での看護研究活動が一般的となりつつある。しかし、施設内研究に関する受講者間の意見交換によると、未だ看護研究に関するサポートが十分ではなく、不安に思っている人が少なくはなかったことから、施設内では研究に関する指導者を必要としていることが伺える。それぞれの施設の人材育成のために、施設の多くが出張扱いにするなど所属部署や管理部門の理解とバックアップを受けて受講されているのも、特徴的な傾向であった。地域における大学と実践の場での連携の重要性がここにある。今後も、当講座の活用が期待される。

3. 受講内容と自己評価

各回に共通した質問のうち、「就職後、研究を学ぶ機会があったか」を除く5項目の自己評価は、研修内容の理解に関して大半が「思う」もしくは「ほぼ思う」の回答であり、研究内容について一定の評価が得られた(図2)。特に「Q25.研修から得られた内容は有用だった」と、「Q26.今後の仕

事や研究に役立つ”，の自己評価は，講座の目的達成に直接反映できる評価項目であり，本講座が受講者にとって意義深い講座であったことが明確となった。

初回の研修コースでは，クリティークを除く5項目において9割以上の人が「理解できた」と回答していた。特に“Q3. 研究の意義と目的がわかった”と“Q6. 文献検索の必要性がわかった”については8割前後の受講者が明確な回答を示しており，研究へのモチベーション向上につながっていると思われる。“Q8. クリティークの方法と手順がわかった”の，論文を批判的に読む研修は必要度の高い講義であるが，他に比べると理解度がやや低かった。日ごろから様々な論文を読む機会が少ないことも要因と考えられる。一方，今回の研修により批判的に先行研究を読むことの必要性や重要性は理解できたと推察される。今後は受講者自身の自己研鑽も求められるところである。

第2回目の研修内容であるデータ処理については，受講者個々の自己評価内容に差があることが浮き彫りとなった。操作が全く初めてで不得手に思っている人から，ある程度日常的に使用されている人，さらには高位レベルのスキルを持つ人までの幅がみられた。学部内教員のサポートは9割以上の受講者から好評を得た。演習は話を聞きながらのパソコン操作であったため，受講者個々人の足並みがそろいにくく，限られた時間内の講義の進行を遅らせる。教員のサポートは講義を効果的に進行させ，データ処理の習熟をより促したと考える。今後はさらなる工夫として，レベル1「初心者コース」あるいはレベル2「レベルアップコース」などのように受講者のレベルに合わせたきめ細やかな講座のプログラムを用意する必要がある。

また，第3回目の研修内容である研究成果報告の理解度では，「思う（はい）」と答えた人に「ほぼ思う」と答えた人を加えると，すべての項目において9割以上の人が肯定しており，当講座の内容はおおむね理解できていたと言える。Microsoft OfficeのPowerPointを用いた演習を行ったが，多く受講者にとって達成度が高く，今後の講座企画に参考となった（図5）。

以上の検討を踏まえ本講座を振り返ると，全体として，受講者らにとって意義深い講座であったと推測される。またキャリアアップ講座のプログ

ラムに関する改善点も，結果として得ることが出来た。

中山ら(2012)は，看護師の免許を得てから主に育成できる実践能力についての調査を行い教育と臨床指導者との看護実践能力育成に関する差異や，臨床における継続教育で育成する能力，新人看護師の研修のあり方などを明らかにしている。専門職者として質の高い看護実践能力を獲得する上では，継続教育や研修が必要であることは当然のことと言える。現場において研究に基づくエビデンスが求められるようになり，研究の必要性も増している。また，A大学看護学部には，①人々の「健康で豊かな生活」を支える看護実践能力を重視した看護基礎教育を行うこと，②人間性豊かな看護者を育成すること，③地域住民の疾病予防から療養支援，健康増進とその教育・研究に幅広く貢献するという理念がある。さらに本講座に工夫を加えて，地域に貢献できる看護系大学附属キャリアアップセンターとして発展していきたいと考えている。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の調査対象者は8割以上が看護職者で占めており，看護職者中心の考察となった。また質問紙調査の方法は，毎回受講者数が異なるため，当日のプログラムがすべて終了したその日の受講内容について回答を得ている。一般的に研修終了直後に取った質問紙調査は，講師に好意的な回答がなされる傾向があるとされており，その影響は否定できない。受講者の客観的な評価を得られる回答時期については，今後の検討課題とする。また，受講前後の比較検討を想定した研究デザインではなかったこと，加えて今年の講座参加人数が38名であり量的調査をするには対象数が少なく検定ができなかったことは，今回の研究の限界と言える。

平成23年にセンターが設置され，本年度で3年目を迎えた。受講者は平成23年11名，平成24年38名，平成25年の38名を合わせると計87名となった。今回の研修終了時調査により対象者に若干の学習効果が確認されたが，講座の本当の意味でのねらいは，講座受講後の受講者が，学んだことをそれぞれの所属先において活用することをバックアップすることにある。長期的に受講者の今後について検討し，将来的に展望をもったキャリアアップ講

座を目指していきたい。

VII. 結 語

本稿では、A大学看護学部附属キャリアアップセンターが開催しているキャリアアップ講座について、平成25年度受講者の受講動機や受講後の自己評価を振り返り、受講者にとってのキャリアアップ講座の有用性について評価するとともに、今後の課題を得ることを目的として検討してきた。その結果、以下の結論を得た。

1. 受講者の特徴は、病院勤務の女性看護師が最も多く、少数の職種は中学校の養護教諭、施設勤務の保健師、病院勤務の助産師、准看護師、介護福祉士、作業療法士であった。
2. 組織における上司の声かけの存在が、受講の後押しとなっている。
3. 受講動機には積極的な動機と消極的な動機があったが、看護研究の担当になった人が多く、職場における自らの役割と責任を果すために受講していたのではないかと推測される。また、院内看護単位での看護研究活動が一般的となりつつある中、施設における人材育成のニーズに応える講座として利用されていた。
4. キャリアアップ講座は受講者の自己評価において高い評価を得ることができた。また、看護研究の一連の方法において、文献のクリティークとデータ処理の実際においてプログラムの工夫が必要であるという結果を得た。
5. 以上より、受講者らにとって有用な研修であったと考えられる。

当講座の成果とその必要性を広く地域社会へ公表することは、大学の使命と考えている。地域貢献を役割とする看護系大学の当センターが、現場と研究をつなぐ懸け橋となり、研究支援をベースにますます互いの交流を深められるとよい。そのことは、地域全体の健康促進に繋がっていくものと考えている。また、今後の継続的な当センターの利用とともに、受講者が獲得した研究に関する知識と技術の現場への活用が期待される場所でもある。私達は、地域と大学の相互作用として互いのキャリアアップを促進するためにも、医療・福祉・教育関係者の方々には大学を身近な存在として受け止めてもらいたいと願っている。

謝 辞

質問紙調査にご協力頂いた平成25年度キャリアアップ講座の受講者の皆様、そして講座の運営に関わって頂いた看護学部の教員の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 大湾明美 (2006)：沖縄県の離島における高齢者の地域ケアシステム作りに関わって、看護教育, 47(5), 384-388.
- 川野雅資 (2004)：地域貢献なくして看護の発展はあるのか、日本看護科学学会誌, 24(1), 60-65.
- 川野雅資, 河原宣子, 伊藤千代子 (2005)：地域での信頼関係の構築を目指して 三重県看護大学「地域交流センター」の活動から生まれた成長モデル, 看護教育, 46(3), 195-199.
- 新道幸恵 (2006)：教員が地域貢献できるシステムづくり 青森県立保健大学の取り組み, 看護教育, 47(5), 378-383.
- 鈴木真知子 (2006)：長期療養児の在宅ケア支援システムを構築して, 看護教育, 47(5), 389-393.
- 聖泉大学看護学部附属看護キャリアアップセンター委員会 (2013)：聖泉大学看護学部附属看護キャリアアップセンター平成24年度活動報告, 1-39.
- 中山洋子, 横田素美 (2012)：看護基礎教育から継続教育における看護実践能力の育成内容, 福島県立医科大学看護学部紀要, 14, 1-11.
- 永野美津子, 島田千恵子, 藤尾麻衣子, 宮脇美穂子, 工藤綾子, 服部恵子, 小元まき子, 稲富恵子 (2007)：A看護系大学の地域貢献活動に関する研究—地域住民の期待と今後の課題—, 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 3, 58-63.
- 永峰卓哉, 片穂野邦子, 古川秀敏ほか (2005)：総合実習；しまの健康 県立長崎シーボルト大学の取り組みの実際, 看護教育, 46(3), 186-194.
- 本田芳香, 春山早苗, 朝野春美, 上野久子, 福田順子, 高久美子, 渡井恵み, 小松 香, 茂呂悦子, 塚本友栄, 村上玲子, 横山由美, 千葉理恵 (2012)：大規模病院で働く看護職のキャリアニーズの特性—地方都市の大学病院における調査から—, 自治医科大学看護学ジャーナル, 10, 47-57.
- 松永早苗, 加納亜紀, 上野範子 (2012)：今後のキャリアアップセンターのあり方に関する検討, 聖泉看

護学研究, Vol. 1, 89-90.
宮地文子, 中崎啓子, 野川とも江, 甲田 望, 渡部尚
子, 石田靖子, 矢嶋千歳, 越塚静江, 服部満生子
(2003): 看護学校教員の教育プログラムに関する研
究, 埼玉県立大学紀要, Vol. 5, 133-138.
森 明子 (2006): 患者会と共同作業した不妊に悩む人

のための冊子『My choice不妊治療 私らしい選択
のために』, 看護教育, 47(5), 394-398.
柳川久美, 細田泰子, 星 和美 (2011): 専門・関心
領域を明確にしている中堅看護師のキャリアデザイ
ンとその環境要因, 大阪府立大学看護学部紀要, 17
(1), 1-12.